

ブログ「野次馬雑記」連載

No135 1968—69年 全国学園闘争 立命館大学編その1



全国学園闘争シリーズ第7回目は京都の立命館大学。立命館大は、1981年、広小路から衣笠に全学部が移転してしまっており、写真を撮る意味もないので、今回は現地調査をしなかった(京都まで行けない)。(写真は毎日グラフから転載)

この立命館大学の闘争の様子が毎日新聞に掲載されているので見てみよう。

【「日共王国」に反乱の火】1969.2.13 毎日新聞(引用)

『全国の大学が学園紛争にゆらぎ、消え去っても最後まで“生き残る”だろうといわれた京都の立命館大学にいま大きな騒ぎが持上がり、その存廃を問われている。全国の大学関係者の称賛のまとだった「立命館民主主義」そのものが学生たちから「これでいいのか」ときびしく“告発”されているのだ。

12日午後開かれた全共闘主催の大衆団交でも、末川総長は約二千五百人の学生を前に「立命館民主主義の形がい化と私の怠慢に対するそしりは甘んじて受ける」と学生の前に首をうなだれた。“形がい化”の中身とはどんな

ことだろうか。

<「理想の学園」が・・・>

立命館大学といえばいまから20年も前から総長選挙への学生の参加を実現させたほか、理事者、教授、職員、学生の参加する全学協議会、学園振興懇談会、問題があるたびに各学部で開く“五者会談”(大学側3人、学生側2人が出席)を設けるなど、学生参加の“教祖的存在”。学園には対話の花が咲き、授業料は格安で、なんら文句のつけようがない「理想の学園」というイメージがあった。

東京大学が11日に批准した“15項目確認書”などはすでに20年も前から実践してきた大学。その立命館大学が大きくゆらいだのだ。

<学園新聞を押さえろ>

騒ぎが持上がったのは、昨年12月12日午後1時過ぎのこと。

「立命館学園新聞社」に日共系の学園振興懇談会委員長ら十人の学生が押しかけ「学園新聞を“民主化”するために入社させろ」と迫ったことから始まった。

「学園新聞は大学全学の意見反映の場でなければならない」「立命館全学友の利益になる新聞づくりを」と口々に呼号する十人の学生とその応援グループはそのまま編集室に乱入「入社時期(4

ー5月)をとっくに過ぎたいま、大量入社は認められない」とはねつける編集部員とにらみあい、乱闘さわぎにまでなった。

学園新聞の奪いあい。いま全国各地の大学で、日共系、反日共系の間に激しくくりひろげられている闘いのひとつだ。

日共系は「学園新聞の民主化」を唱え、逆に反日共系は「日共＝民青のいう“民主化”とは実際は“民青化”でしかない。新聞のセクト的乗っ取り反対、報道の自由を守れ」と反論する。

そして立命館学園新聞は、反日共系の中でももっとも先鋭的なグループなのだ。

立命館大は理事会、教授会、学友会、教職員組合、生協、生協労組と日共系がつぎつぎに勢力化におさめていった。知る人ぞ知る“日共王国”。

それだけに“日共の一元支配”にたてつく学園新聞は日共系にとって目の上のタンコブ的存在だった。こうして“集団入社強要事件”が起こった。

しかし、日共系のこの強行戦術が、結果的には裏目に出た。寝た子を起こす結果となった。

それでなくとも「立命館は日共の一元支配・赤い巨塔」「末川総長は日共にあやつられるロボットでしかない」とふだんから息のつまる思いがしていた“一般学生”が一斉に立ち上がり、日共攻撃を始めたのである。

とくにこの事件に対してとった大学当局、教職員組合などの態度があいまいだったため、学生の憤激は高まり「立命館民主主義とは立命館民青主義でしかなかったのか」という思いを強くさせることになった。

平和な学園は大きくゆれ、反日共系の学生は「大学の権力を握った学友会＝日共勢力が自分の思いどおりにならない新聞社を乗っ取るために、あらゆる手続きを無視し、ソ連を中心とするワルシャワ条約機構軍がチェコ侵入を行なったとまったく同じ行動をとった」と一斉に反撃を開始した。そして1月16日には寮生が中心となって“民主立命の徹底した告発”をかかげて、大学本部のある中川会館を封鎖、占拠、東大安田講堂のあとを追った。

<一般学生と乱闘>

日共系もただちに反日共系締出しに転じ、22日深夜“外人部隊”を含めた五百余人が中川会館に攻撃をしかけた。

放水、投石、乱闘とあとはおきまりのコースだが、このあとただ立命館ではよその大学には見られない“珍現象”が起こった。

体育会の呼びかけで六百人近い“一般学生”が間に割ってはいり、日共系学生に「攻撃はやめよ」と迫ったのだ。

日共系は「こいつらは一般学生じゃない。“かくれ三派だ”」となおも襲いかかり、あろうことか日共系と一般学生との乱闘にまで発展した。

よその大学では“一般学生”をあれほど大切にする日共系が、と目を疑うばかりの状況。しかも大学当局がなかば公認しての日共系の攻撃だけに一般学生たちはますます大学攻撃の火の手を強めた。(後略)』(つづく)

No136 1968—69年 全国学園闘争 立命館大学編その2



前回に引き続き立命館大学の闘争の様子を紹介する。
69年1月22日の日共系による封鎖中の中川会館攻撃関係の記事が朝日ジャーナルに載っているのを見てみよう。
【関西にみる東大紛争の衝撃】1969.2.9 朝日ジャーナル
(引用)
『(前略)
代々木系の誤算は立命館大学でもっとも鮮明にあらわれてくる。

立命館大学でも京大と同じく、22日夜、大学当局から黄色ヘルメット500個が配給され、京大学生部に武装部隊が突入したほぼ同時刻に、ゲベ棒部隊約200人が封鎖された中川会館に突撃した。

すじ向いから中川会館を見下す存心館屋上には、援護射撃のため数百人の投石部隊が配置され、京大と同様、放水もおこなわれた。しかし、中川会館は陥落しなかった。

というのは代々木ぎらいの体育部を中心とする一般学生が毎日つめかけており、その日は千人以上にもふくれ上がって、武装突撃隊の前に立ちふさがり、素手のうずまきデモで武器を奪って、校門から放り出してしまったからである。

実は代々木系は、これに先立って“暴力学生”実力排除に関して、全学同意をとりつけようと着々と手を打っていた。

18日には代々木系が牛耳る五者共闘(一、二部学友会、生協理事会、同労組、教職員組合)と大学当局との間で「封鎖解除、中川会館内に軟禁されている学寮委員の身柄釈放を20日正午までにおこなえ」という「寮連合」(封鎖派)に対する最後通告を決定。

20日には大学当局と五者との共催で五千人を集める全学集会を開き、即時解除を決議する。(中略)

そしてこの日は、代々木系学友会一派が封鎖解除に押し寄せたが、体育会などの学生が間にはいって收拾してしまう。

ここで代々木系は戦術をきりかえ各学部五者会談と拡大学園振興懇談会を開いて、実力解除の大義名分をとりつけようとする。(中略)

学友会は代々木系が牛耳っているが、学部長も半数が代々木系だといわれ、実力解除、武器供与は簡単に決まった。

ところが、話し合い路線を主張する林屋辰三郎文学部長は、実力解除、学部長の自己批判を叫ぶ代々木系学生に一晚抵抗したあげく、22日の理事会に辞表を提出、これに文学部三役の山本幹雄教授と佐々木高明助教授がならった。

さらにノンポリの名和献三・経営学部長と橋本次郎、理工学部長が辞表を出し、理事会の崩壊によって拡大学振懇は宙に浮いてしまったのである。

こうして立命館では京大のように全学一致による武力解決がとれなかったため、理事会は急遽平和解決の方針を改める。

が、この方針変更が武装突撃隊に伝達されないうちに、戦端が開かれてしまった。

ということは、京大と同時期に、大学の“正規軍”として攻撃を開始するという代々木系上部のスケジュールが、簡単に変更できなかったからであろう。(後略)』

翌2月20日、2月18日のゲバルトを口実に機動隊が学内に入り、中川会館の封鎖は解除される。(写真は18日の様子。朝日新聞報道写真集より転載)

【立命館大にも警官隊】1969.2.20 毎日新聞(引用)

『乱闘事件 要請なしの“独自搜索”』

京都府警本部は20日午前7時40分、大阪府警からの応援500人と府下28署からの約100人を含む制私服警官千八百人を動員、大阪府警のヘリコプター、警備車2、放水車、無線車各1台を装備、京都市上京区河原町広小路の立命館大学広小路学舎を搜索した。

学生の抵抗はほとんどなく、凶器準備集合罪、公務執行妨害、傷害、暴力行為容疑で先月16日くらい反代々木系学生が封鎖する本部、中川館をはじめ、18日夜から19日朝にかけて大乱闘のあった存心館および周辺広場など4ヶ所を検証した。

この間、学生約500人が西門にまた約400人が中川会館前広場にすわり込んだが、小ぜり合い程度で大きな混乱はなく、検証は急速度で進められ、同9時すぎ学生1人(黙秘権行使)を市公安条例違反現行犯で逮捕、警官2人が2日間のケガをしたほか学生数人も軽いケガをした。

同大学では去る18日夜、法学部の反代々木系学生が存心館を占拠したのをきっかけに、同館にたてこもる反代々木系と、その奪還を旨とする学友会の代々木系学生が18時間にわたって投石、放水、角材による乱闘を重ね、19日午後零時半、反代々木系の退去で存心館は封鎖解除されたが、学生約100人が重軽傷を負った。(うち1人重体、2人重症)

府警は19日最高幹部会議で強制立ち入り捜査の線を決めて末川博総長に協力を要請、学内立ち入りを反対してきた同総長も「自主解決は旨ですが、法による捜査ははばめない」との態度を示したものの。

学園紛争の対立をめぐる乱闘事件で大学側の要請なしで立ち入り捜査するのは関西ではこんどがはじめて。

また、立命館大に警官隊が入るのは戦前戦後を通じて最初で、封鎖中の中川会館は1月16日から35日ぶりに解除された。』(つづく)

No139 全国学園闘争 立命館大学編「二十歳の原点」



前回まで立命館大学闘争を紹介してきたが、立命館大といえ
ば、この人が思い出される。

「二十歳の原点」を書いた高野悦子さん。(写真は週刊読書人か
ら転載)

69年1月から5月にかけて、彼女も立命館大全共闘の一員とし
て闘争に参加していた。

そして69年6月24日、貨物列車に飛び込み自殺。二十歳であっ
た。

彼女の手記は今でも読まれているが、この手記がベストセラーに
なった時期、「週刊読書人」に掲載された書評があるので見てみ
よう。

【無名の死。風化した死】1971.8.16 週刊読書人(引用)

『高野悦子著「二十歳の原点」(新潮社)がすでに8万部を超える
ベストセラーになっている。

いったい、なぜ若い世代は、彼女の死に魅かれ、その手記を読む

のか。

読まれる原因がひそむ状況の中に、実は大変な頹廃があるのではないか。

その頹廃は高野悦子の死を変貌させてはいないか。

ここでは彼女の死の周辺を分析する。

「戦いか然らずんば死。血みどろの闘争か然らずんば無。かくの如くに、問題は厳として課せられて
いる。 ジョルジュ・サンド」

高野悦子の手記「二十歳の原点」を読むにつけ、このジョルジュ・サンドの言葉を思いださずには
いられない。

本当はこの手記を読むべきではなかったのではないかと、暗い憂うつな思いにもとらわれるので
ある。

なぜなら、読めば読むほど、こういうふうにとり上げれば、とり上げるほど、高野悦子の死はますます
“風化”し、色褪せて、彼女自身、手記の中で書き記したように「自殺は敗北であるという一片の
言葉で語られるだけのものになる」(6月1日)からである。(中略)』

筆者は“風化”の原因として、1番目に高野悦子の手記を商業出版として遺族が出すことを決めた
ことと断じている。

同じ6月に遺書もなく、手記もメモも焼却して“無名者”として自殺した早大生の死と比べ、“死”が
商品になる、これが風化でなくてなんであろうかと。

2番目に彼女の死について勝手な解釈や想像を加える人間やメディアや登場である。

なぜ高野悦子は死を選んだのか？ 実のところは当の本人以外分かるはずもないのだから。

3番目に読書側の頹廃した二つの対応、ひとつは「二十歳の原点」を作品として読んでいないかと

いうこと。

『たとえどんなに秀でた作品であっても、作品は作品である。

現実の「闘い」に己の死を賭け、生身をさらして書いた独白とは、あるいは、その一語一句にひとり
の人間の重い現実がのしかかっている手記とは、自ら次元を異にしているのだ。

その手記にはまごうことなきひとりの人間の生があったはずである。「手記」が、そして現実にあっ
た死の重みが、一片の虚構の中の生と死と同様に読まれること、これは“風化”した死に他ならな
いだろう。(中略)』

そしてもうひとつの読者側の頹廢とは

『これが高野悦子のおかれていた心的状況であった。

三つのモチーフ、孤独感、生への不安(絶望)、そして終末感、これらは実は、70年安保も敗北し、
一時の大学闘争の連帯感も喪失し、生きてはいるが、かといって確固たる展望も持ち合わせな
い、現代の若い世代の心的状況にぴったりと相応しているのである。

この三つのモチーフへの共感は、とりもなおさず、実は自らに対するいつくしみと慰みにほかなら
ない。

手記を媒介にしての、手記を自らを写す鏡としてのこの自己憐憫、自己慰安、これこそ読者自身
のもうひとつの頹廢である。

生者たる読者のための安逸の手段と化した高野悦子の死、これは最悪の状態まで“風化させられ
た死”といえるだろう。

樺美智子しかり、奥浩平しかり、山崎博昭しかり、そして高野悦子の死も風化しつつある。

もはや、これ以上の“風化”は防がねばならぬ。

もう一度、冒頭にかかげたジョルジュ・サンドの言葉に立ち戻って、考えねばならないだろう。

戦いか然らずんば死。血みどろの闘争か然らずん無……。』

最後に、全共闘白書に掲載された立命館大学全共闘の皆さんの発言を紹介して、終わりにした
い。

【全共闘白書】(新潮社発行 全共闘白書編集委員会編)(引用)

『「ぜひ発言したいこと」という質問に対する回答(抜粋)

<立命館大学> 67年入学

全共闘運動がアツケなく(と私は思っている)終わってしまったのは何故だろう、またどうすればもっ
と現在も続いているような運動になっていたのだろうか、いつも当時を思うと考えてしまいます。

67年入学

以前は団塊の世代はみんな全共闘をやっていた連中と同じ気分と信じていたが、どうやらわれら
が全共闘は少数派のようだって最近気付いた。』

「二十歳の原点」については、<1969-1972 連合赤軍と「二十歳の原点」>というサイトがあり、こ
の手記について非常に丁寧に語られている。

黒を基調としたモノトーンのデザインで、トップページにあるヘルメットを被った女性がタバコを吸う
シルエットが印象的なサイトである。(リンク参照)(終)